

『蒙求和歌』第三類本 本文 (三)

——哀傷部から雑部——

阿尾あすか・小山順子・竹島一希・蔦清行
中島真理・濱中祐子・森田貴之・山中延之

はじめに

本稿は、本誌二十七号(二〇一二年三月発行)掲載の『蒙求和歌』第三類本 本文(一)——四季部——および二十九号(二〇一三年三月発行)掲載の『蒙求和歌』第三類本 本文(二)——恋部から述懐部まで——の続稿である。翻刻・校異は以上で完結である。

【凡例】

一、底本は第三類本に分類される山口県立山口図書館蔵『蒙求和歌』(所蔵番号142)に拠った。

二、翻刻凡例

- ・翻刻は底本ままと原則とし、合符以外はそのまま翻刻した。
- ・濁点、句読点を私に付し、漢字は通行のものに改めた。
- ・見消し前の本文は(〜)内に記し、その右に訂正後の本文を傍記した。

・底本の頭注は【頭注1】のように注記し、和歌のあとに掲げた。割注および傍記も複雑な場合は、【割注】・【傍記】

のように注記し、あとに掲げた。

- ・ルビの訓点は()内、ルビのルビは「」内に記した。頭注・割注内もこれに準じた。左ルビは(左)とした。
- ・判読不能箇所は、□を記し、推定本文を()内に傍記した。

・活字化しえない漢字は■とし、「」内に説明を加えた。

三、読者の便を考慮して、以下の処理を施した。

- ・各段の冒頭に、通し番号と蒙求標題(明治書院新釈漢文大系『蒙求 上下』による)を掲げ、同蒙求標題番号(三〇)のように記す)を補った。

・和歌は、一類本(平仮名本)由来のものには、(平一)、二類本(片仮名本)由来のものには、(片一)のように、それぞれ新編国歌大観による歌番号を付した。完全には一致しない場合、(片一)のように記した。

四、【校異】として、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本(国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料(ヤ3-6-4、C3700)に拠る)との対校を行った。ただし、本文における有意の異同のみを注記した。

五、翻刻・校異は次のような分担で行った。

阿尾あすか……………151

小山順子……………151

竹島一希……………160

葛清行……………171

中島真理……………181

濱中祐子……………191

森田貴之……………200

山中延之……………201

担当箇所は相互に点検を実施した。従って、翻刻・校異については、執筆者全員がその責を負うものである。

本文と校異（前号続き）

蒙求倭歌 第十一

哀傷部廿首

墨子悲系 楊朱泣岐 仲文照鏡

陵母伏劍 紀信詐帝 隱之感隣

王褒柏慘 羊祐識環 臨江折軸

史魚黜殯 鄺寄壳友 范張鷄黍

扁鵲起甕 謝敷応星 張華台坼

庶女振風 緑珠墜楼 鉏麴触槐

王果石崖 董奉活變

【校異】

(一) 坼——折（岸）

(二) 董奉活變——董奉活變（岸）

151 墨子悲系〈三三〉

淮南子 墨子悲糸 墨子悲糸 墨子淮南人也

墨子、白きいとをそむるにしたがひて、きにもなり、黒くもなりゆくについて、うきよの色もまたうつろひやすく、さだめなき心ほそきを思ひみだれつゝ悲ひけり。

しらいとのうつろひやすきいろよりもほどぬものはうきよなりけり（片146）

【校異】

(一) 心ほそき——心（ほ）そき（岸）

152 楊朱泣岐〈三四〉

同楊朱泣岐

楊朱、もの（人）ゆく道の辺に立て行客を見れば、或は東をさし、或は西にのぞむあり。北とやせむ、南とやせん、何か家、何か旅、と思に、ありはてぬなごりも哀に思しられて、なき立たりけるなり。

いづちとてわれさへいそぐみちならんゆくもとまるもありはてぬよを（片146・平128）

【校異】

ナシ

153 仲文照鏡〈三六三〉

晋書 仲文照鏡

仲文は殷の人也。もとより名望たかゝりき。朝に仕へて政をとるべき身ぞと思けるに、其事むなしくして東陽の太守になされけるをうき事に思ひけり。是故に桓胤ともに謀叛をおこしてけり。其時鏡を見るに、頭みえざりけり。驚き恐れける程に後にくるされにけり。

かはりけるすがたにしりぬますかゞみこのよにかげをとゞむまじとは

【頭注】

本文／殷仲文陳郡人

【校異】

ナシ

154 陵母伏劍 (一三三)

前漢 陵母伏劍

陵母とは王陵が母也。漢祖と項羽とあらそひ^三戦ふ時に、王陵党を結て、数千の兵を集て、漢祖の方につきぬ。項羽、王陵をよばむ^三と思ふ心ふかし^三。はかりて陵母をとりこめて、王陵をよぶに、陵母ひそかに王陵が許へ使を遣て、我身かくてあればとて、いたみ思ふべからず。漢祖のために忠を極てふた心を見えたてまつらざれ、といひやりつ。さて我身しばらくもかくてあらば、王陵われを思はんゆへに心よはき気色もぞ人に見ゆる、と思て、陵母なく／＼劍の上に伏て命をうしなひにけり。

いきてこそ子を思ふやみにまどふなれ命をすつるあともあり

けり (平 130)

【校異】

(一) あらそひ —— あらそひ^か (岸)

(二) よはむ —— よは^む (岸)

(三) ふかし —— ふか (岸)

155 紀信詐帝 (三九〇)

前漢 紀信詐帝

紀信は漢祖の將軍也。容貌漢祖にゝたり。漢祖、嘗陽^三にて項羽に困まれてあやうくみえける時、紀信すゝみて云、事すみやかなり。我君に代て革車にのらむ。項羽、我を高祖と思て我にかゝらん時、君は質をやつしてのがれ給へと云て、車に乗かはりぬ。漢祖含つきて^三、楚に降り給由をいひなすに、項羽、悦て、あたりをすても^三車をかこめり。高祖其隙にのがれぬ。革車すでにちかづき来れり。高祖にはあらずして紀信なりけり。其心を美て、汝を我方の將とせむといふに、紀信が云、忠臣者不^レ事^二主^一、勇士者不^レ得^二詔言^一、汝まさに漢に降ぜよ、といふに、項羽いかりて紀信を殺さんとするに、悔る心なし。身をまかせて焼ころされぬ。

たちのぼる煙を見てぞ身にかへておもひけりとは思ひしりぬる (片 149)

【校異】

(一) 嘗陽 —— 嘗陽 (岸)

(二) 含つきて —— 食尽て (岸)

(三) すても —— すてゝ (岸)

156 隠之感隣 (二〇七)

晋書 隠之感隣

呉隱之【頭注1】にあにおとゝ丹陽にあり。母にをくれて後、強に嗅て悲

びける程に絶いりにけり。道行人来集て哀びたすけ遣て、いきでにけり。隣の里に韓康伯といふ人あり。其母、隠之なくゝを聞て、おやを思ふ心のあさからぬ事を哀と思ひ知にけり。康伯をよびて、汝、選官たらむ時は、隠之が心したらむ輩をもちゐるべきなり、といひけり。

きゝわたるとなりのさともかなしきはこずゑしぐるゝ松かぜのほと【片150】 ※傍記 片150

【頭注1】

本文 / 漢陽鄂城人

【頭注2】

本文兄弟ノ事ナシ

【校異】

(一) 呉隠之 —— 呉の隠之 (岸)

157 王褒柏慘 (二九五)

王褒柏慘

晋の王褒、父にをくれて墓の辺にいほりをむすびて、なくゝあかしくらしけり。涙はかの上の松柏にかゝりけり。松柏これ

がために、いたみかれたる色をなせり。常に詩をよみけり。又云、褒常に墓所にいたり。柏のもとに跪て、なくなく涙木にかゝりて、木これがために、かれたりといへり。慘の字なし。おぼつかなし。

いほりさすをかべのかゑのしづえまでおなじなげきの露ぞこぼるゝ (片151) ・平133

【校異】

(一) なくなく —— なく (岸)

158 羊祐識環 (五四)

羊祐識環

私云羊祐字は叔子也

晋の蔡邕之外孫羊祐は太山の人也。身の長七尺三寸、容貌美麗にして、広く学び深くさとれり。羊祐五歳の昔、めのとをよびて、我もてあそびし金環えさせよと云ひければ、さきゝさる物なかりきと答へけり。隣の人李氏之東の園の桑の中にありといふ。此時にめのと行てさぐり出してけり。あるじ驚て、この金環は、我小児の、五年がさきにはかなくなりしが、うしなへりし物也。いかにして取出せるぞ、とあやしみ問に、めのと始より此事をつぶさに語けり。李氏これを聞に、我子のうまればかりにけるよと思に、せんかたなく悲て哀におほくけり。ふるさとのいけのたさも【片152】 ※傍記 片152

【校異】

(一) おほくえ —— おほえ (岸)

(二) たさもを —— たまもを (岸)

159 臨江折軸 (三六四)

前漢 臨江折軸

【割注】

臨江の閔王は漢の武帝の長子なり、はじめイ江王となされぬ。後に召かへさるゝ時、臨江をいづるとて車よこがみ折にけり。臨江の老父是を見て、道の門出によこがみすでおれたり、我(君) (三) かへらむ事はなはだあやうかるべし、となきけり。さて長安の中尉にいたる郅都(後漢)責許王(梁)々恐て自殺しぬ。藍田にはうぶられにけり。鶯、数百集て塊を含て、はかのうへにをきけり。

としをへてしづみしだにもある物をかへりくるまにかゝるべしやは (片153) ・ (平135)

【割注】

漢書曰、景帝四年為^{タリ}皇太子^ニ四歳^{ニシテ}為^ル臨江王^ト云々 (三)

【傍記】

簿^ツ本^敷

【校異】

(一) 我(君)^王 —— 我君(岸)
(二) 云々 —— 云々イ(岸)

160 史魚黜殯 (五〇九)

家語 史魚黜殯

衛の大夫史魚、やまひをもくなりて、しなんとするにのぞみて、

子をよびて云、靈公の蘧伯玉が賢なるをもすゝめ給はず、弥子瑕が不肖なるをもしりぞけ給はざる事をいきて諫申をば聞給はざりつ。我しなば、階^{階本}下に喪せよ、と云て死にけり。靈公大^大にきゝ驚て、我あやまれる所なりとて、喪を正堂にうつし、蘧伯玉をすゝめて上卿となして、弥子瑕を退られにけり。孔子、

是を聞給て、いにしへ君を諫しものも死るまでは思はず、史魚かばねをもていさめ申す、直なり、とぞほめ給ける。
つゆきえしこけのしたまでとにかくにみちなきよをぞおもひ

をきける (片154)

きえかへるあとまで君をおもひをく涙の露をあはれとぞみる (平136)

【校異】

ナシ

161 酈寄売友 (三八九)

前漢 酈寄売友

酈寄と呂禄とは交りふかき友也。高后崩じて、酈寄なさけなく大尉周勃にかたらはれて、呂禄をはかりて殺させてけり。天下の人、酈寄ともをうれり、とぞはぢしめける。

あさましや思へばうとき中なれどをはりをしたふなさけやはなき (片155)

【校異】

ナシ

162 范張鷄黍（一〇六）

後漢 范張鷄黍 小引范六字は巨卿也

後漢の范式と張元伯とは志あさからざりし友なり。ふたりがすみかの遠さ千里を隔たりければ、春の天にわかれざりて秋の末に後会を期しけり。元伯、九月十五日黍の飯をして鷄をまうけて范式をまつに、母の云、道千里を隔たり。只今かならずもしかるべからず、といふほどに、范式すでに来れりといへり。

又云、范式元伯にわかるとて、二年の後日を定て後会を契てけり。其期いたりて、母、酒をあたえめてまつに、范式来て拝飲すといへり。

又云、元伯やまひ重くなりて、しなむとする時、我、范式と命を限し友也。死ても范式にあはむと云て、ひき入てけり。棺におさめて墓にうつさむとするに、ひつぎ動く事なし。人驚きあやしみけり。母の云、元伯いまはの時に臨て云事ありき、范式とは我とは命をかぎる友也、死ても范式にあはむと云き。此故にまつところあるべし、と云程に、西のかたより素衣白馬の人はせきたるあり。即范式なりけり。棺のかたはらにおりぬ。

我夢の中に元伯来て、命すでに終りぬ。今ひとたびあひ見ん事を思に、よみぢも行やらざと云き。さて驚て馳来れる所に、すでに夢のうちのごとし、といひもはてず悲ひ泣事こゑもおしまず。親きうとき、是を見るにあはれをもよをさすと云事なし。しばしありて、ひつぎをもつにかるくなりぬ。墓におさめて、范式みづから土をはこびて墓をつきて喪礼おえて、なく／＼かへりぬ。

きえかへりくものちさとをへだてゝもともまつ雪のあはれを

ぞしる (片156)・(平138)

【校異】

- (一) あたえめて —— あたゝめて (岸)
- (二) 入てけり —— 入にけり (岸)
- (三) 范式とは —— 范式と (岸)
- (四) しる —— (す)る (岸)

163 扁鵲起虢 (四六四)

史記 扁鵲起虢

扁鵲姓は秦、名は越人。時名医也。虢の太子のすでに死るを見て、扁鵲治しつべしと云て、すなはち治するにいきいでにけり。兄二人ありけり。其一、さとの中に病するものなかりければ治方のしるしもきこえぬほどなり。

扁鵲、桓公を見て、君病ありと云。桓公もちぬす。後にふして見あをぎて見て治せんとこふに、汝病なき身を治して、其功をたてんとおもへるなるべしと云て、扁鵲がいつはれるになして猶もちぬす。扁鵲、又桓公を見て立はしりてかへりぬ。

時に桓公、病重く煩て、扁鵲を召て、治をよと云に、扁鵲答て曰、はじめ病をみしに病かはべにありき。針灸のをよぶ所なれば治せん、とこひしに聞給はざりき。次に病を見しに、血脈にありき。湯薬の所及なれば治せむ、とこひしに君病なしと云て聞給ざりき。後に病を見しに、やまひすでに骨髓に入て薬のをよぶところにあらざりしかば退にき。今まさに治しがたかるべし、と答てさりぬ。桓公命をはり給にけり。秦の穆公、俄にたましる矢にけり。扁鵲にみせしむるに、死 (人) からず、

七日ありて生かへるべしといふ。七日にいきかへりて云、我、鈞天にのぼりて百神とともにあそびつ。天帝悦で、鈞天の広楽の妙曲をつくしき。即此曲を伝たり。是故に扁鵲がさとりをほめて、田一百町をたまひけり。扁鵲云、我云事の験をばあらはしつれども、治する所の功なければ賞をうけず、と云てかへし去ぬ。

かれはつる色かとみしをはるさめのときはにかへすいきの松ばら(片157)

すまの浦にもしほびやかぬあだ人のはて(煙とのぼるなりけり(平139))

【頭注】

有_二兄_一二人 本伝不見

【校異】

- (一) 越人 —— 越人_本(岸)
- (二) 治をよ —— 治せよ(岸)
- (三) 死(人)からす —— 死(人)からす(岸)
- (四) はて —— はては(岸)

164 謝敷応星 <二〇〇>

謝敷応星

晋の謝敷、字は慶緒と云き。初月の少微星を犯せる天変あり。

此星の一の名は処土星ともいへり。司天のうらなふところ、隠士のつゝしみと奏せり。于_レ時戴安道、隠士(道) _三としてし _〇【補入】るには _三あれども、戴安道つゝしみのりて、つゝ

がなくして、謝敷其殃にあたりて死にけり。其後会稽の人士、呉の人をあざけりて云、呉中の高士は死をもとむれどもえずといへり。

こもりえのみくさかくれにすむにほのをはりもうらにしろく _〇やはあらぬ(片158)

こもりえにきゆるつらゝのあととはゝやほしのひかりのさすに _〇ぞありける(平140)

【補入】

かも美才あり。世の人はおしみうれへけり。しか

【頭注】

コホリヲツラ、トヨメリ

【校異】

- (一) 隠士(道) —— 隠士(岸)
- (二) しかるには —— しかは(岸)

165 張華台坼 <四六二>

張華台坼 _三

晋の張華、字は茂先、范陽人也。鶴鵲の賦を作し人也。後に司空たり。張華之少子臚あふぎてうらなふに、中台の星坼 _三アリ。

_{(五) 神聖}をすゝめて、つかさをのがれよと諫けり。張華云、天道は玄遠(玄〇〇) _三徳を修てこたふべしと云て、おどろかずしてすぎけり。終に害にあひてはかなくなりけり。

かげまがふほしは雲井に名をとめてなみにきゆるはよはのか

どりび (片159)

なかたえしほしのやどりにこゝろせで雲がくれけるはてぞか
なしき

【校異】

(一) 拆——折 (岸)

(二) 遠 (左〇〇) 須く——遠し須く (岸)

166 庶女振風 (八七)

推南子 庶女振風

本注ト大ニ違アリ (二)

【割注】

齊の庶女がおぼ、ひとりの女ありけり。此女、母の財をとらむ
と思ふ心ありて、母をころして庶女にかくと云けり。庶女、こ
れを聞き、あさましく心うく思へども、人にはえいはずして
天に告てけり。于レ時雷電くだりて、景公の台 (三) をうちかたぶ
け、海水大に出て世おどろき、人ことくくさはぎまどひけり。
あめとよみか (げ) さはぐなりよの中の人のこゝろのうきく
ものそら (片160) ※見セ消子前 (片160)

【割注】

私云、江文通云、庶女告レ天振レ風ヲ襲ニ於齊堂。

【校異】

(一) 本注ト大ニ違アリ——ナシ (岸)

(二) 景公の台——景公台 (岸)

167 緑珠墜樓 (二七九)

晋書 緑珠墜樓

緑珠は石崇の妓女也。艶色美麗にしてなきけふかく、すべて物
の哀をしれりけり。舞曲の妙なるのみにあらず、笛をさへぞ吹
ける。石 (崇)、これに心をうつして年月をへけり。石崇、金
谷の別館の清涼台に登て、清流を結て、緑珠と共にすみけり。
時に孫秀と云人、緑珠をいかでかえてしがなと思へり。孫秀、
使をおこせて石崇に緑珠をこふに、石崇、かたへ (三) の妓女を救
十人をして、羅縠をきせて質をかざり、蘭麝をつゝみて句
をそへつゝならべて (三) 多らばしむるに、使、緑珠に志ざせり。
緑珠は我とし比志深きものなりければゆる (す) ず (三) 使むな
しく還ぬ。孫秀いかりて、趙王に訴へて、石崇がもとへ兵を遣
せり。兵すでに門のほとりに来てすゝむを、石崇、樓のうへよ
り是をみるに、おもふかたなくて、汝がために忽に命を失はむ
こと痛み思にあらずと云に、緑珠きゝもはてず、汝が罪をえん
事も我ゆへなり。我まづ命を終らん (四) と云て、泣々楼よりおち
てしゝけり。

わかくさのつゆのちぎりのかなしきはみどりの玉のおちにけ
るあと (片161)

【校異】

(一) かたへ——かたへ (え) (岸)

(二) ならへて——なすらへ (すえ) て (岸)

(三) ゆる (す) す——ゆるさす (岸)

(四) 終らん——終えん (岸)

168 鉏覺触槐 (三三八)

左氏伝 鉏魔触槐

（公）鉏魔^二は晋の靈^三の力士也。晋の大夫趙遁^{神本}、忠臣として靈公のさかりに懦て政の横なるを諫るに、靈公、心えぬ事に思なりて、趙遁を失はむとす。鉏魔におほせて殺しにつかはす。鉏魔ゆきてみるに、朝服を着てあからさまによりふして、夜の

あくるをまつけしきなり。鉏魔これをみるに、今も忠勤の姿なり。もとよりも君をいさむるは忠ありて失なし。是をころさむ事は正に不忠なるべし。ころさずは命をうけたまはりて変ずるになりぬべしと思へり。すなはち身づから頭を槐に触てしぬ。趙遁、首山にかへりして桑下の（飯）人^三をみる。示味明

なり。趙遁、食をあたふ。半をくひのこして母にあたえんと云ふを哀と思て、なを飯食^三をあたえけり。さて共にゆくゑをしらずなりぬ。後に晋の靈公、趙遁をうしなはんとて、酒を勸て数盃を責けり。示味明すゝみて云、君觴を賜ふ。三行してかへるべしといへり。趙遁すでに去ぬ。靈公の伏士、縦^{ハナチテ}二嚙狗^一、

名をば敖犬といへり。示味明、趙遁をたすけんために搏^ニ殺^ツ狗^ヲ。又車の片輪をぬきて趙遁を殺さむとするに、示味明よこがみをひちにうけて家に送てけり。趙遁、われをたすくる人は誰ぞと泣々間に、桑下の餓人なりとばかり云て、名をばあかさずして去ぬ。

としをへてかたみにちぎるなかだにもいのちにかはるあとはまれなり（片162）

なにはがたあしかりぬべきことのはに入江の浪のをとなせせとや（平143）

【校異】

- （一）（公）鉏魔——公鉏魔（岸）
- （二）桑下の（飯）人——桑下の餓人（岸）
- （三）飯食——飯完（岸）

169 王果石崖（二二六）

神皇志 王果石崖

將軍王果、昔益州之太守として任に赴くに、道、三峽をすぎけり。船の中より江崖石壁のうへへの余丈を望みみるに、櫛に似たる物、さしのなかばの程にかへりけり。道ゆき人に問に、これを見る事ひさしくなりぬと云けり。人をよせて見するに、すなはち一のひつぎなりけり。中に骸骨あり。傍に石誌あり。銘にいはいはく、三百年の後、水漂^レ我^ヲ、行^テ及^ニ長江^一、垂^リ一、欲^レ不^レ墮^ニ、遇^ニ王果^一とかけり。王果、是を見て愴然として云、數百年のさきに我あるべしと云事を知れり。我見すつべきにあらず。即あらためうづみてまつりして、涙をおとしてさりぬ。

あはゞやおもふころのくちせでやかばねのゝちもわれをまちける（片163）

【校異】

- （一）まちける——まちける（岸）

170 董奉活變（四六三）

神皇志 董奉活變

董奉は候官の人也。交州の刺史杜^三燮、毒に中^テて俄に死にけり。三日をすぎて後、董^三奉、太一散を水に和して杜^三燮が

うべにそゝきければ、即いきいでにけり。みづから云、はじめ人来て車にのせて、穴をほりて我を埋て土してふさぎ。時に太一の使と云人来て、穴をほりあけて我をいだせり。さていきいでたるなりといへり。

たちかへるなみのしるべはみつせ川そゝきし雨のしづくなり
けり (片164・平145)

【校異】

- (一) 董——董^董岸
- (二) 杜——士^岸
- (三) 董——董^董岸

蒙求和歌第十二

管絃部十首

女蝸補天 簫史鳳台
蔡邕倒屣 蔡琰弁琴
宓賤弹琴 師曠清耳
伯牙絶絃 戴逵破琴

【校異】

- (一) 秀——子^秀岸

171 女蝸補天 (四四九)

淮南子 女蝸補天

女蝸は女帝也。伏羲氏の妹、吉祥^吉岸^善の御身といへり。昔四極すたれ、九州さけたりしに、五色の石をねりて補^補蒼天^天。

(左以下非本文)
女蝸はじめて琴箏簫笙をつくり給へり。琴を作り、はじめて引時、白雲飛て前に来れり。簫を作て吹時、六月に霜くだれり。一たび曲調をなすに、天下大に振ふ。笙を作り吹時、鶯来て鳴といへり。

そらはみなとだえも見えずはれにけりことのねゆへぞ雲はたなびく (片165・平146)

【校異】

- (一) 作り——作て岸

172 簫史鳳台 (五三五)

列仙伝 簫史鳳台

簫史は秦の穆公の時の人也。常に心をすましつゝ簫を吹けり。孔雀飛来て、翼をそへて舞けり。すべて簫史が簫の声をきく人の、涙をもよほさぬなし。穆公の女に弄玉といへる人、なさけふかく色をしれる心にて、簫史が簫のこゑにめでゝ、忍てあひ給にけり。ふた心なくて年月を送りむかへけり。簫史、弄玉に簫を教ふるに、たどるところなく学びえてけり。鳳鳴の曲を吹に、鳳凰飛来て屋の上にすみて是をきけり。すなはち鳳台をつくられにけり。もろ共に台に登て、月のひかりの蒼々たる夜、ふけゆく空の物哀なるに、簫を吹けり。于^于時鳳凰、此二人をいざなひて遙に飛去にけり。其跡に鳳女祠をたてられにけり。ふゑのねをくものいづくにさそひけん月にうてなのあとをのこして (片166・平147)

【校異】

ナシ

173 向秀聞笛（一・一七）

晋書 向秀字子期 向秀字子期

晋の向子期、清悟にして遠識ありし人也。旧友（稽）^{（一）}康、琴詩酒に携て聞えたかゝりし人也。大將軍として政をこなへり^{（二）}。内史鍾会と云ふ人、（稽）^{（三）}康に交を好みけれどもゆるさざりけり。鍾会そねみて、（稽）^{（四）}康世の政をそしれる由を司馬文王に讒し申ければ、文王、人のことにつきて、（稽）^{（五）}康をころさむとす。（稽）^{（六）}康、（ら）れへたる^{（七）}いろなし。忽に琴をとりにて広^{（八）}陵散の曲を引て云、そのかみ袁孝尼、われにしたがひてならはむといひき。我秘てを^{（九）}へざりき。うらむらくは此曲永く絶なん事をといへり。（鐘）^{（一〇）}会来て、我にしたがはず命をたすけんと云へ共^{（一一）}、（稽）^{（一二）}康もちみずして、頸をのべて罪にしたがひぬ。三千人の学士、こひうけて師とせむとすれども、終にかなはざりけり。其後、旧友向子期、ふかくこひしのびけり。于時（稽）^{（一三）}康がふるさとをすぐるに、日、虞淵にせまりて、寒氷^{（一四）}凄然たる冬の空の心ぼそきに、かはら（む）^{（一五）}すみかを見るにも、ゆくゑなくりにし哀を思ひつゞくるおりしも、隣に笛のこゑのするを聞て、涙をおさへて思旧賦をつくれり。其詞云、隣人有吹^{（一六）}笛者、発^{（一七）}其声寥亮、退想^{（一八）}疇昔^{（一九）}遊宴之好^{（二〇）}とかけり。

【校異】

んとは（片167）・平148）

おもひきやぬしなきやどに袖ぬれてとなりのふるにねをそへ

- (一) (稽) —— 稽 (岸)
- (二) 政をこなへり —— 政をとれり (岸)
- (三) (ら) れへたる —— うれへたる (岸)
- (四) 広 —— 黄 (岸)
- (五) (鐘) —— 鍾 (岸)
- (六) 云へ共 —— 云へ (り) (岸)
- (七) 旧 —— 窓 (岸)
- (八) 寒氷 —— 氷 (岸)
- (九) かはら (む) —— かはらぬ (岸)

174 蔡邕倒屣（三〇二）

後漢 蔡邕倒屣

中郎將蔡邕、賢才世にきこえ、管絃道を極たりし人也。昔、王粲を見てねんごろにほめけり。其後、家に賓客を集て大会する時、王粲、門の辺に来臨めりと聞て、倒屣いそぎて出むかつて云、汝、王公之孫也^{（一）}。異才あり。我家の書籍文章ことごとくにあたふべしといへり。王粲よはひいとけなく、かたち短少也。一座の人悉に目を驚かしけり。十七にして司徒たりけり。蔡邕、柯亭の館にいたりて、竹椽を見て、良竹なりと云て、取て笛にぬれり。声よにすぐれたり。又大山に桐の木をたきて、いひかしくものあり。やけはためくこゑを聞て良木なりとさとりて、琴につくるに、甚美声あり。やけぬをつくりのこせり。焦尾琴と名て宝物たり。

蔡邕枕銘云、哲人降鑑、居安聞欣。

きりのこゑだけのひゞきもみにししみき人をしりけるころのみかは（片168）・平149）

【校異】

(一) 王公之^本孫也 —— 王公孫也 (岸)

175 蔡琰^{後漢}弁琴 (四六九)

蔡琰^{後漢}弁琴

蔡琰、字は文姬、蔡邕が女也。蔡琰九歳なりける時、蔡邕、よる琴を(引)に(二)、あやまりてひとつの絃をきりてけり。蔡琰にいづれの絃のをと(二)か聞と(二)へば(三)、第二の絃なりといふ。又わざとひとつの絃をきりて間に、第四のをなりといふ。されるところ、いづれもたがふ事なし。蔡琰が云、昔、季札は觀^レ化^ヲ興亡の国をしり、師曠は吹^レ律南風の不^レ競^〇ば(三)しれりき。是をもてこれをおすに、何ぞそれをもしらざらむとぞいひける。

蔡琰が夫董祀、死罪にをこなは^〇む(四)とす。蔡琰、曹操にまうで(二)、夫の罪にかはらむとなく(二)こひうくるに、満座の賓客これを哀びけり。曹操ゆるしてけり。

あき風のまつにこたえしくれのみちこをおもふつるのこゑもかはらず (平150)

【校異】

(一) (引)に —— 引に (岸)

(二) と(二)へは —— と(二)へ(二)へは (岸)

(三) 不^レ競^〇は —— 不^レ競^〇は (岸)

(四) をこなは^〇む —— をこなはむ (岸)

176 巫馬戴星 宓賤弹琴 (二四一 二四二)

巫馬戴星 宓賤弹琴

巫馬期、单甫令に成て、日夜にやすくある事なし。星を戴ていりつ(二)、身をいたましめて所をおさめけり。後に宓子賤、单甫の令になれる時、琴を(引)に(二)堂よりおりざれども、所おさまりけり。巫馬期、其ゆへを問けり。宓子賤答云、汝は力をもておさむ、我は人に(三)まかせておさむ。ちからをつくすは劣す。人にまか(せ)る(三)は安しといへり。

たきつせやみどりの水をむすびてもすゑをば人にまかせける
かな (片169)・(平151)

【校異】

(一) (引) —— 引 (岸)

(二) 我は人に —— 我は^期人に (岸)

(三) まか(せ)る —— まかする (岸)

177 師曠清耳 (三六一)

師曠清耳

師曠は、心管絃に長じ、耳清濁をわかちき(二)。晋の平公の時、大鐘を鑄てたくみにきかするに、みなこゑと(二)のほれりと思へり。師曠、いまだと(二)のほらずといへり。師涓(三)も師曠に同ず。師曠琴を引に、鶴、南より来て廊門の上にあつまりて、くびをのべてなき、翼をのべて(三)舞ふ。照王の琴をひかしむるに、風曲をひく時には(四)、大風ふきて屋の瓦(五)みなとび、雨曲(五)を引時は、天噎々として雨くだれり。師曠云琴の曲半(六)陰陽調和すとて王ほめ給ける。師曠しにて後、ひとつの琴あり。かなしび

なけるこゑありといへり。

山風にとふべかりけりはなのかねまだいろづかぬこゑのには
ひを(片170)・(平152)

【校異】

- (一) わかちき——わかち(て)岸
- (二) 涓——絹岸
- (三) のへて——のふて岸
- (四) 時には——時は岸
- (五) 雨曲——(河)曲岸

178 荀勗音律(二三八)

荀勗音律

晋の尺荀勗、字は公曹也。鍾繇之外孫也。よく音律をわきま
へけるゆへに、楽官になされにけり。昔遇趙商人於路、懸
鐸於牛角、識其声。のちに音韻いまだと、のほらざるに、
荀勗が、趙の牛角のうへの鐸をえて、すなはちと、のへむ
といへり。于時郡国よりことくくをくらしむるに、音律
と、のほる事をえたりといへり。

すみにけるこゑのひゞきをしる人のこゝろの水のあさからぬ
かな(片171)・(平153)

【校異】

- (一) 曹——曹岸
- (二) 荀勗か——荀勗か云岸
- (三) をくらしむるに——をくらしむるに岸

179 伯牙絶絃(二八)

列子 伯牙絶絃

伯牙、琴をよく引けり。是をしれるものは鍾子期ひとりぞあり
ける。伯牙、山の曲をひく時、鍾子期がいはく、峨々たること太
山のごとし。こゝろざし流水にあり。伯牙、水の曲をひく時、
鍾子期が云、洋々たること江河のごとしといへり。鍾子期しに
て後、伯牙、絃をたちて琴をひかずなりぬ。知音のながくたえ
たる事をいたみけるゆへなり。

いかにせむむかしの(と)りも(と)のをもかきたえにける
こゝろぼそさを(片172) ※見セ消子前(片172)

【校異】

- (一) 太山——大山岸
- (二) (と)り——とも岸

180 戴逵破琴(二九九)

戴逵破琴

晋の戴安道は譙国の人也。常に心をすましつゝ、琴をひき文を
学びて、しづかによをおくりき。武陵王晔、琴曲をゆかしく
思て、召につかはしけり。使にむかひて、琴をうちはりて云、われ
王門の伶人にあたはずと答へけり。王いかりて戴安道がこのか
み術を、なすに、欣然としてすゝみゆきて琴をひきけり。

ひとりなを思ひすてけむことのをのうちひくこゑもあればあ
るよに(片173)・(平154)

【頭注】
不_レ為_二王門伶人_一

【校異】
ナシ

蒙求和歌第十三

酒部廿首

杜康造酒

樂巴_ヲ嘜酒_ン

阮宣杖頭_{ヅンセン}

陳遵投轄

楚元置醴

山簡倒載

左慈擲杯_ニ

淵明_ニ把菊

叔夜玉山

盧植_ニ首鐘

玄石沈酒_ヲ

劉伶解醒_醒

広客蛇影

陶侃酒限_限

文伯羞鼈

孝伯痛飲

畢卓甕下_下

勾踐投醪_醪

阮籍青眼

文季座滿_滿

【校異】

(一) 擲杯 —— 擲坏 (岸)

(二) 淵明 —— 泉明 (岸)

(三) 盧植 —— 盧桓 (岸)

181 杜康造酒 (二二二)

杜康造酒【割注】

杜康_ハ酒をつくりし人也。魏の武帝の詩云、

何以_テ解_シ我憂_ヲ、唯有_二杜康酒_一

たけの葉のみどりのつゆをくむほどぞよのうきふしもしばし

わするゝ (片174)

【割注】

杜_{徒古四、赤(一)}
棠也、塞也

【校異】

(一) 赤棠也、塞也 —— 赤棠乙塞也 (岸)

182 樂巴嘜酒 (三六五)

樂巴_ヲ嘜酒_ン

樂巴、字は叔元、為_二尚書_一、武帝の時、正旦に群臣をめして大会あり。樂巴、酒をふくみて西南にむかひてふきけり。おほや

けゆへを問ひ給に、蜀江に火災あり、このゆへに是を吹也と申。

人を遣てみせらるゝに、失火ありといへども、俄に東北よりお

ほ雨ふりて、其雨酒気ありて、火をけちをはりぬ、と奏せり。

みやこよりふりくるあめや春くさのもえいづる野べをそらに

しりける (片175)

心あれやさはへのゆきをしたばとけもえいづるあしに春雨の

そら (平156)

【校異】

ナシ

183 阮宣杖頭 (二〇二)

阮宣杖頭

阮宣杖頭

晋の阮脩(二)、字○といへり。常に百錢を杖のさきにかけて、かちより酒店のほとりにいたりて、ひとり酔くらしてかへりけり。時の人におほきにたふとびらるゝ身なれども、よにもつかへ○。心をたてゝ、ときめく人のもとへもゆかざりしかども、酒のかたになれば、かくなんありける。

うぶ多つきかへるい急ぢにまよはぬはもとの心ぞしるべなりける (片176)・平157)

【校異】

(一) 阮脩 —— 阮宣 (岸)

184 陳遵投轄 (一六九)

前漢 陳遵投轄

陳遵、家に賓客来集て酒をすゝむるに、かへらんなごりをおしみて、客の車の轄をぬきて井のそこになげゝるなり

春かぜにこほりのくさびうちとけてながるゝ水のなごりをぞせく (片177・平158)

車に有二流水之号、故に曰と

【校異】

ナシ

185 楚元置醴 (四九一)

前漢 楚元置醴

楚の元王劉交、書術を好て穆生(二)をめして賓とす。王酒をたしなまず(三)、これがために(左アキサガケ)醴酒を二けり。

たまだれのこがめなくてはわたつみのふかきみちをもちかゝとふべき (片178)

いまだしる花のひもとくおく山のふみみるみちも籌折けり (平159)

【校異】

(一) 穆生 —— 穆王 (岸)

(二) 酒をたしなまず —— 已上イ无 (岸)

186 山簡倒載 (一七〇)

晋 山簡倒載

山簡、字は季倫、荊州の刺史たりき。家を出て必酒に酔てのみぞかへりける。岷山の南に范蠡養魚、作魚池。このほとりに、たけ、ひさぎ、色々の蓮、ひしなどをうへまはして、おり／＼の景気、心をうごかさずと云事なし。天下の人來集てあそぶ所なり。山簡常に此池に來て大に酔て、我高陽池なりと云て、あらぬけしきになりてかへる。襄陽城中の童、歌をつくりて云、山公(魯記)何ト許ト往テ、至高陽池、日夕に倒に載て帰る、酪酊して無レ所レ知、馬能本に乗て白接籬をさかさまにしけるなり。

接籬、羅の白帽あり。白鷺の翅の上二有二長旄毛一、これを取てつくるなり、といへり。永嘉三年に天下大に乱て、万方しづかならざりけるにも、山簡ひとり酒に酔ふことをこたらざりけり。

なつのいけにすゞみくらしてけふも猶かげさかさまにかへるなみかな (片179)

ゆふかぜの玉こそ池のはちすばにさめに(本ぬカ)心のみづもありけり。

り(平160) ※見セ消子前(平160)

【傍記】

出二本

【校異】

(一) さめに本ぬカ — さめに本 (岸)

187 左慈擲杯 (三四二)

神仙譚 左慈擲杯 廬江人也

左慈、少時に五経にたづさはり、六甲に通じ、星氣にあきらかにして鬼神をつかひけり。おほやけこれを聞給て、召て酒をすゝめらるゝに、冬天さむかりければ、酒をあたゝめけるに、あたゝめずぐしてけり。左慈かんどしをぬきて、酒をかく事物を摩がごとし。さて飲をはりて、さかづきを屋のむねになぐるに、うごく事飛鳥の形のごとし。やゝひさしくして池におちぬ。諸人さかづきをみる程に、左慈をば見うしなひてけり。

あまのはらくもゐにみえしさか月は山のはいづといはぬばかりぞ (片180・平161)

【校異】

ナシ

188 淵明把菊 (五二五)

南史 淵明 字淵明或云字深明本

晋の泉明(二)は陶潜之字也。琴詩酒を好し人也。門には五もとの

柳をうへて、春の心をなぐさめ、砌にはひともの菊をつくりて、秋のともとぞたのみける。九月九日酒なかりければ、ひとり菊をつみてゐたるに、やゝひさしくありて白衣の人來れり。王弘が許より酒を送れる使なりけり。泉明(三)のみて酔にけり。琴を引て(四)志をあらはしけり。

泉明、もとは淵明也。淵の字を泉になせる事は唐の高祖の諱をさるゆへなり。宋朝には複旧といへり。

とふ人をいくたびかりられし(五)とかまがきの菊にかずをゝらまし(六) (片181)・(平162) ※傍記(片181)・(平162)

【校異】

- (一) 泉明 — (淵)明 (岸)
- (二) 引て — 引て (岸)
- (三) うられし — うれし (岸)
- (四) ゝらまし — ゝらまし (岸)

189 叔夜玉山 (五六)

叔夜玉山

【割注】

晋山公が云、嵇叔、夜すがたは巖々巖々本として、孤松のひとりたてるがごとし。ゑいたる事隈然隈然本として、玉山のまさにくづれなるとするがごとしといへり。常に琴をひき酒をすゝめて、心をなぐさめけり。後に中散大夫たり。

あき山のもみちのいろにゑいにけりさめたる松の名をうづむまで (片182)・(平163) ※傍記(片182)・(平163)

【割注】

私云〈稽〉^格 康字ハ叔夜譙群人也

【校異】

(一) 〈稽〉^格 —— 稽〈岸〉

190 盧植音鐘〈二一六〉

^{後漢}盧植 音鐘

盧植^三、こゑのひゞき鐘のごとし。酒を飲事一石、ゑはぬ時もなしといへり。

こゑはたゞかねのをとかときこえつゝ心はゑいのねむり^三なりけり (片183)

暁の夢だにさむるかねのをとにいかながびくゑいの眼ぞ (平164)

【校異】

(一) 盧植 —— 盧桓〈岸〉

(二) ねむり —— ね〈ふ〉り〈岸〉

191 玄石沈湏〈三七三〉

^{博多志}玄石沈湏

玄石 中山の酒家に行て酒をかふに、酒家千日の酒をあたえけり。飲てゑいふしぬ。家人此事をしらずして死たるぞと思て、なくく棺に入てつかにうづみてけり。酒主、千日にもなりぬらむと、かぞへてあたひの錢をせめに來れるに、玄石はやくしにゝきといふ。酒主つかをあけてみるに、すなはち酔さめてひつぎの中より出たり。やをらたすけてぐして家にかへしてけり。

家人、驚きさはぐといへども、酔さめぬと思ひときてけり。時の人の云、玄石飲^レ酒一たび酔て千日といへり。

こけのしき^三しづむうきなはふりにけりさてしもいけるいのちなれども (片184)

うづもれしこけのしたよりさめぬればしでの山ちやゑいのふるさと (平165)

【校異】

(一) しき —— した〈岸〉

192 劉伶解醒〈三七四〉

劉伶解醒

劉伶、字は伯倫^三、たけ六尺、かたちみにくかり^〇。常に鹿車に乗て、一壺の酒と鋤とをとも人にもたせてありきて、我のみ酔てしなばいづくにも堀埋め^三と云けり。劉伶、昔、のどかはきて酒を求けるに、其妻頻になきわびて云、君酒をのむ事、大にすぎたり。生をおさむる道にあらざ。是をとゞむべしといへり。劉伶答云、よくいひたり。まさに神にちかふべし。酒肉を儲けよといひけり。妻いふ、まゝにさまぐに調てけり。劉伶跪て云、天劉伶をうめり。酒をもちて名をえたり。ひとたびに一石五斗のみて解^レ醒^三、婦人のことはなはだ聞べからずと云て、劉伶酒完をすゝめて頽然^三としてまた酔ぬ。はるかぜとゝもにゑいをばすゝめどもそらにこゝろのやみははれぬる (片185)

をぐるまのゑいにのりけるみちなくてまた心やるかたもなき身に^イ (平166)

【校異】

- (一) 伯倫——伯伶^ゆ岸
- (二) 堀埋^{よか}め——堀埋^ゆめ岸
- (三) 類然——隈然岸
- (四) また——またまた岸

193 広客蛇影 一三三

晋書 広客蛇影

樂広之家に親客来て、酒をすゝめてかへり後^て、かきたえこざりけるをあやしと思て、其故を問に、君之家にて酒をたふべし^しに、さかづきの底に蛇ありき。心にけやく思ひながら、すでにのみをはりにき。それより病になれる由をなん答えけり。樂広、酒のみし所を見るに、河南の廟のかべの上に弓をはりてたてたり。弓にうるして蛇の形をかけるあり。さかづきの底はこの弓のかげよと心えて、また酒を儲てよぶに、客来りぬ。此事をさとりえて、病すなはちいへにけり。

ゆみはりの月ともいまぞしらくものそこにくるのやみははれぬる (片186)

【校異】

- (一) かへり後——かへりて後岸

194 陶侃酒限 五七四

晋書 陶侃酒限

陶侃は孝子也。母湛氏、賢明にして法訓にあきらか也けり。陶

侃夢の中に、八の翅おいて天門に入とみてけり。後に八州の都督たり。陶侃、武昌にある時、もろくのかしこき人來り集て酒をすゝむるに、陶侃三盃をのみけり。客をのしひけり。良久くありて云、我わかきいとけ^なかりし昔、父の侍し時、酒の失ありき。父にちかひしかぎりをすぎて飲べからずと答て、かたくいなびてやみぬ。母うせてのころ、はかにみて独なげきけるに、二人の客きたりとぶらふあり。かへるをみれば、白鶴となりて飛去にけり。陶侃、武昌の道の辺にうへたる柳を、人ぬすみて家にうへてけり。陶侃のちに見て、ぬすまれたる柳と云に、ぬし神なりとおどろきけり。

いしにさはりはなにせかるゝさかづきもみたびにすぎてまたじとぞ思ふ

ちかひをきし心のすゑをかへじとぞなき跡までも思ひさだめし (片187・平168)

【校異】

ナシ

195 文伯羞鼈 二〇三

晋書 文伯羞鼈

文伯、南宮^三敬叔之酒を得て鼈を儲て、露堵父むかへて客として、客にはすこしきをすゝめ、をのが身はおほくしければ、堵父いかりてくはずして出ぬ。文伯が母敬姜これをきゝて云、祭には養^レ戸^ヲ饗には養^上賓^ヲといへり。さて文伯が礼をしらざる心を恥しめてをい出で、五百家にいれざりけり。敬姜は穆伯が妻、文伯が母、莒女也。

はるやまにともをよびけるうぐひすのをのれひとりやはなに
あそぶべき（片188）

春かぜの人を木かげにさそひきて花をばをのが物となしける
（平169）

【校異】

（一）南宮 —— 南宮の（岸）

196 孝伯痛飲（四四八）

世説 孝伯痛飲

王孝伯云、名士はかならずしも奇才にをよばずとも、常にこと
なくして、酒をのむ事を痛て離騒をよむべしといへり。

ながきよのゑひのまどひのゆめのうちをひとりさめばと思は
かりぞ（片189）

【頭注】

本文 飲酒ヲ熟読ニ離騒ヲ便チ可シ称ス名士ト

【校異】

ナシ

197 畢卓甕下（二〇二）

晋 畢卓甕下

吏部〇郎中、畢卓は晋代の人也。酒を好て職をもすたれけり。

ゑひて隣の人のもたいのほりに行て、酒をぬすみのむ程に、
酒あづかれるもの、ぬす人いりにけりとおどろきてしほりてけ

り。あけゆくほどにあるじ聞つけて行てみるに、畢吏部〇

なりけり。あさましくもおかしくもおぼえけり。すなはちとき
ゆるして、もたいのものにいざなひゆきて、酒のみ遊てはるか
に時うつりてかへしつ。

ぬしやたれかへるやわが身〇ころにもあらでまよひし〔頭注〕ゑひの
さと人（片190）

【頭注】

本 惑人 万葉是歟

【校異】

（一）吏部 —— 李部（岸）

（二）ゑひて —— よるゑひて（岸）

198 勾踐投醪（四二五）

古列女伝 勾踐投醪

越王勾踐、呉王夫差をせむるに、醇醪一器をたてまつるものあ
り。勾踐これを見て、使をしてみなかみにそゝがせて、士卒に
下流下流をのましむるに、味よき酒なりけり。士卒たゝかふちから
百倍せりといへり。醇は清、醪は温也。ともに旨酒也。

【校異】

ナシ

199 阮籍青眼（五七〇）

阮籍青眼

晋代人阮嗣宗といへり

晋の阮籍は、竹林の七賢の其一也。厨に美酒をおほくをけり。眼に青白の色を分てり。凡俗の人には白き眼をしてむかひ、異才の人には青眼をしてむかひけり。阮籍、父にをくれてゐたるに、楊州の刺史、嵇喜と云人きたれるに、白き眼してむかひけり。おとゝ嵇康、のちに琴酒をぐして行てとぶらふ時、青き眼をしてあひむかへりけり。

しらくものはれゆくあとはこけむしろあをねがみねのこずゑなりけり (片192・平173)

【校異】

ナシ

200 文举座満 (四九五)

後漢 文举座満

魏の文举、北海の相たりき。卅八になりける年、おかす所ありて官を解て家にこもりあて、勢をうしなふといへども、世人才芸をめで、かれこれ家に来りあつまりて、酒をすゝめて日々に遊びくらしけり。座上の客つねに満て、罇の中に酒不空、なにをか愁とせんとぞいひける。

さもあらばあれはるによそなるやどゝてもかすみをくまぬと
きしなれば (片193)・平174

【校異】

ナシ

蒙求和歌 第十四

雑部 五十首

燕昭築台	司馬称好	蒼舒称象
丙吉牛喘	陳寔遺盜	魯恭馴雉
劉昆反火	広漢釣距	陳重送金
袁安倚頼	秦密論天	黄琬対日
任座直言	孫綽才冠	載馮重席
韋賢滿籟	安世三箇	子房取履
太叔弁治	摯仲詞翰	管寧割席
周公握髮	鄒陽長裾	夏侯拾芥
黄向訪主	南風擲孕	彦倫鶴怨
孟宗寄鮓	王承魚盜	毛宝白龜
養由号猿	鄒衍降霜	不疑誣金
檀卿沐猴	辺韶経筒	嵇紹不孤
文翁興学	優旃滑稽	惡来多力
飛広善走	蘇章負笈	孔愉放龜
西門投巫	郭伋竹馬	劉寛蒲鞭
黄尋飛銭	馮媛折券	何曾食万
婁敬和親	王陽囊衣	馬援薏苡
董遇三余	桓温寄骨	

【校異】

- (一) 蒼舒称象 —— 蒼舒称象 (岸)
- (二) 洽 —— 蛤 (岸)
- (三) 猴 —— 獲 (岸)
- (四) 韶 —— 詔 (岸)
- (五) 広 —— 廉 (岸)

(六) 寄——奇(岸)

201 燕昭築台(四一)

史記 燕昭築台

後漢燕の昭王、位につきて身を賤卑本くし礼をあつくし賢を重くし文を好み給へり。郭隗ニを召て師とす。昭王、国に才智の人のなき事を嘆きうれへ給に、郭隗ニ申て云、君われをだにももてなしあがめ給はゞ、才智を重くし給君ぞと普く聞えて、外の国々より我にまさらむ人来りつかふニべきよしを申き。心づきて台を築て、郭隗を重くし給へり。于時樂毅、魏よりきたり。鄒衍、齊より来り。劇辛、趙より来れり。是皆きこえたかゝりし人也。此後国をたもつ事をえたり。

おもへたゞ人めまれなる山かけにはなまちえたる春のうてなを(片194)

めづらしきかげを雲井にさそひこししるべは月のうてなゝりけり(平175)

【校異】

- (一) 郭隗——郭隈(岸)
- (二) つかふ——つとふ(岸)

202 司馬称好(一六〇)

司馬称好

後漢の司馬徽、字は德操、潁川の人也。口に人の短をいはず、人の物語するに、好悪吉凶をとはず、すべて人の云事をばことごとく好とのみ称せり。郷人来て我子の死たるといひあひけれ

ば、大によしと答えけり。妻此事を聞て、汝が有徳のゆへに人来て、よき事をもあしき事をも云あはするに、子死たる人の返事にさへよしとこたふる事、心なきに似たりといさむれば、汝が云事又大によしと答えけり。

とふ人のことばゞちゞにかはれどもこたふるみちのひとつなりける(片195)

秋山の月ともみちをとふにさへはなにこたふるみよしのゝそら(平176)

【校異】

ナシ

203 蒼舒称象(四一四)

魏志 蒼舒称象

魏の蒼舒は武帝の少子也。劉襄本王の字也。九歳にして成人の智あり。孫推と云人、武帝に大象をたてまつれり。帝、これがおもさをいかほどゝ知む事をおぼしけり。群臣にとはるゝに、答え申人なし。蒼舒本がいはく、象を船本にのせて、船のしづまむ水のたけをきざみて、物をはかりて船につみてくらべて知ぬべしと云に、

衆皆此智につきぬ。

うきふねのゆくへをたれかしら浪(の)わかのうらかぜおもひのよらずは(片196)

おもひよる人もなぎさのあまを舟をためしにひきしわかのうらかぜの(平177)

【校異】

ナシ

204 丙吉牛喘 (二五二)

前漢 丙吉牛喘

丙吉は魯人也。はじめ獄吏として功をつみ、廷尉にいたる。後に丞相にのぼる。大体をつとめ礼讓をこのむ。丙吉、春の日、道をゆくに、清道群人の鬪^{キヨムル}死て道によこたはりふせるあり。丙吉、これをばとはずして、人の曳てする牛をみるに牛のあえぎて吐^{クハク}ッ。これをおどろきて、い^イくさとをゆけるぞと、ふを、行人、丙吉をそしりて云、おなじみちのほとりに人の戦ひしぬるあり。牛のあえぐあり。汝^ニ (ち)の死る^シをば見もとがめずして、牛の喘をおどろけり。人と牛とおなじからずといへり。丙吉答て云く、人のころさるゝ事は、長安の令、京兆尹のをこなふ所也。三公は陰陽をとゝのふる事につかさどる也^三。としのをはりより殿最をおほせて不視^ミ「少事」、これによりて春は少陽なり。いまだあづかるべき程にあらず。ちかき道をゆく牛の暑にたえざるゆへにあえぐ事は、すなはち時節のたがへるなり。気のみだるゝ事は、世のため君のため大なる愁なり。故に牛の喘を問也と答えけり。行人ことほりをほめて、かうべをたれてさりぬ。

昔陳留に富る老翁の歳八十なるあり。女子ひとりありて男子なし。妻死て後、田客のむすめの歳十八なるを妻にして、一夜あひみて後に、翁死にけり。女ひとりのをのこごをうみてけり。さきの妻の腹の女子、おやの宝をわれ一人とらんとて、後の妻のうめるこはこと人の子也。八十の後、胤子あるべからず。

其上父に、ずと愁へけり。州郡さだめえず、丙吉ことほりて云、我聞、老翁の子は寒にたえず、またかげなし。時は八月なり。おなじ年の小児をはだかになしてならぶるに、傍の小児はなかず。翁の子は寒を愁えて泣けり。おなじく日中にならべてみるに、かたはらの小児はかげあり。翁の子はかげなかりけり。すなはち男子に財をあたえて、女子をいつはれる罪にをこなはれにけり。

三公は正^ニ天下^ヲ調^ス陰陽^ヲ節^ス風雨^ヲいへり。

うしとおもふなつのころのふかければかすめるそのなをもたのまじ (片197)

うしとのみやよひのそののなつ衣おりにあはぬよをぞうらむる (平178)

【校異】

- (一) 清道群人の鬪 —— 清道の群人の鬪也 (岸)
- (二) 汝 (ち)の死る —— 汝ち人の死る (岸)
- (三) つかさとる也 —— つかさとる所也 (岸)

205 陳寔遺盜 (四二〇)

陳寔遺盜 寔 ^{時七幼} (二)

陳寔は後漢の人。太丘の長^三たり。家に盜人入て、梁上にあり。陳寔ひそかに是を見てけり。そらしらずして、我子共をよびて云く、不善の人いまだ必しも本よりあしき事あらず。いまさらに来れるなり。梁上公、これなりといへり。盜人此事を聞て、梁よりおちて、恥かなしみてみづから罪をうけけり。陳寔が云、君を見るに形^{カタチ}あしき人にあらず。貧く乏きによりて心をこせ

り^三と云て、布三段をあたえてかへしやりてけり。ながく盗を^四やめてけり。これによりて一県にぬす人なし。

にこりける心のそこをくやしとぞおもひかへりしおきつしらなみ(片198)

いまよりは心のなみもきよかれとおもひしらせし布引の滝(平179)

【校異】

(一) ナシ —— ム云元篇内全無(岸)

(二) 太丘の長 —— 大丘の長(岸)

(三) 心をこせり —— 心をこかせり(岸)

(四) 盗を —— 盗心を(岸)

206 魯恭馴雉(一一一)

魯恭馴雉

魯恭は中牟^{ホツ}の令也。徳政^{ホツ}を行て慈愛を施しければ、国富人樂しべり。司徒袁安、使を遣てみせしむるに実也。使、魯恭が桑の木のかげにやすむところにいたれり。小兒あり。傍に一の雉あり。使人、小兒に問て云、雉かたはらにあり。汝何ぞ不^レ捕。小兒答て云、雉まさにひな^{【養】}り。我になつけり。いたはしく思ふゆへにとらへずといへり。于^レ時使人の云、君すでに三の異あり。一に蝗虫の境にいらざる事、徳をつみて災を撥なり。二に雉(き)さになつけり。仁すなはち鳥獸にをよべり。三に小兒仁心あり。此三の徳を美て去ぬ。後に司徒にいたれり。

うれしやとささはべのきずすしたひこしみちあるさとのあとをたづね(て)(片199)

さてもなをやどるきずすはあるものをまだふたばなる野べのわか草(平180)

【傍記】

ヒキオカリ
将^レ雛^ヲ本

【校異】

(一) 行て —— 行ひ(岸)

207 劉昆反火(四七四)

劉昆反火

陳留人也

後漢の劉昆、字は桓公といへり。光武帝の御時、はじめ江陵の守として赴きけり。俄に火出来て氏^氏の家やけゝるに、劉昆火に向て頭をたゝきて愁えければ、風をかへして火をけちてけり。後に弘農の守に遷にけり。弘農にはたけき虎おほくして人を害しけり。劉昆境に入てより、虎、北の河をわたりて永く去にけり。おほやけ召て侍中とす。いかなる徳政あるゆへぞと問ひ給に、偶然と申せり。左右(う)のすなほなる事を笑ふ。おほやけ、長者の言なりとて、策にしるされにけり。

おもひけつ人のこゝろにしたがひてけぶりにくもるそらもは(れ)にき(片200)

けぶりがとみえし霞の空はれてとらふす野べのほどぞのどけき(平181)

【校異】

ナシ

208 広漢鉤距 (三八五)

前漢 廣漢鉤距 漢代涿郡人也

後漢のよに趙の広漢と云人あり。廉潔なるゆへをもてよに仕えて、少くして為涿郡史^{シベラ}、京兆尹にうつされり。鉤距をなし物物の心をみて盗賊をおさめしに、人みな称伏せり。鉤距は、馬を問はむとてまづ犬を問ひ、羊を問てつぎて馬を問也といへり。鉤距といへるは、鉤は求致して其心をうるなり。距は心にかくしはかるなり。馬のあたひをしらむとて、まづ犬羊をとひて、其後に馬のあたひにをよぶといへり。

ちかづかんひつじのあゆみさとりえてのちぞ^三ひまゆく駒はしりける (片201)・(平182)

【校異】

- (一) みて —— えて (岸)
- (二) のちそ —— のち (は) (岸)

209 雷義送金 (二四四)

後漢 雷義^三送金 字仲公

後漢の雷義^三は汝南の人也。獄吏として死罪にをこなはるべきものをゆるしてけり。限なくうれしと思て百金を送てむくひけり。雷義^三が云、汝を哀と見しゆへばかりにてゆるしてき。むくひをえんためにはあらずと云て返てけり。つみ人、雷義^三が家の承塵のうへにをきて去ぬ。雷義^三此事をしらず。年をへて後に屋をこぼちける時に、金を見いでけり。主をたづぬるに、ぬし死にけりと聞て、跡の妻子の許 (人) けり^三。

金を壁の中にさしはさみてかへりぬともいへり。
あはれてふなさけばかりをさとりてもおもひしれとは思はざりけり (片202)

【傍記】

付^二 臯曹^一 本

【校異】

- (一) 雷義 —— 陳重 (岸)
- (二) 許 (人) けり —— 許へ送りけり (岸)

210 袁安倚頼 (三〇)

袁安倚頼

後漢の袁安、字は邵公、汝南の人也。司徒として世に仕えけり。立居のことはには、世の政のおさまらむ事をのみ身の上の事と思へりけり。政の聊もたがふ所あれば、泣く^レなげきけり。このゆへに、おほやけをはじめて大臣以下^三ことごとくこれをよくれたのみけり。

これやこの人のころをみよしのゝたのむのかりのよるとなくこゑ (片203)

【校異】

- (一) 以下 —— 已下 (岸)

211 秦宓論天 (二一四)

蜀 秦宓論天

秦宓が智ある事を聞て、蜀の国より張温を遣て聘^{ヨハヒ}けり。張温まづ秦宓をこゝろみて云く、天にかしらありや。秦宓答云、詩云、乃^ナチ^眷西^ニ顧^ルといへるは西にあり。又云、天に足ありや。答云、詩云天歩^ト艱難^ニいへり。足なくは何を以かあゆまん。又云、天に耳ありや。答云、詩云、鶴^ニ九^ノ阜^ト声聞^レ天といへり。もし耳なくは何をもてかきかん。又云、天に姓ありや。答云、姓は劉也。天子の性は劉也といへり。父子ことなる事^三あらんやと答え、をはりぬ。此よつの事をこたふるところ、くからぬ事をことにほめて、張温、秦宓をねんごろにうやまひおがみけり^三。

ひとこゑもとゞこほりけることぞなきそらにこたえしあまのかはなみ (片204)

【補入】

鳴^三

【校異】

- (一) 天子の性は——其子の性は^{天子本注加斯}岸
- (二) 父子ことなる事——父子姓ことなる事^岸
- (三) おかみけり——みかみけり^岸

212 黄琬対日 (一一三)

黄琬対日

後漢の魏郡に日蝕ありけり。おほやけ勅を下て、蝕する所の多少^三をとほるゝに、蝕する所十余分にをよびけり。祖瓊、この趣をかきのべむとするに、筆にまどひけり。時に祖瓊が少子黄

琬、六歳にして傍にありて云、蝕のあまりは月の始て出るがごとしといへり。此趣を書のべてけり。幼き心にさどりのふかき事をありがたきためしにて、それより名をえてけり。

きえのころ日かげの雪のいろばかり月は雲まにあらはれにけり (片205)

【校異】

- (一) 多少——多小^岸

213 翟璜直言 (一七八)

翟璜直言^{翟璜本}

魏の文侯と申おほやけ、群臣を召て、我と昔のおほやけと如何と問ひ給に、みな賢君なりとほめ申けり。次第にとほるゝに、任座にいたりて賢君にをよばずと申けり。所以をとほるゝに、中山をうちとりては弟に封じ給はずして、王子に封じ給へりと答申ければ、文侯いかりておひたてられにけり。次に、翟璜^{任座本}にいたりて、賢の君におはせりと申。ゆへを問るゝに、臣聞^フ其君賢なる時は其臣直也。任座が答申事の直なるは、君の賢なればなりと申ける時に、文侯ことほりをよるこびて、任座を召かへして、拝して上卿とし給ひけり。

あまのはらみちなきそらをうしと見しこゝろを月のとがむべきかは (片207)

【校異】

ナシ

214 孫綽才冠（七八）

晋書孫綽才冠【割注】

晋の孫綽、字を興公といふ。ひろく学びけり。才覚きこえ高き人也。天台山の賦を作て、ともだちにみせしむるにともだちほめて云、汝試に地になげよ、まさに金玉の音あるべしとほめけり。すなはち投げれば、金玉のこ多ナなんありけり。時の人孫綽を才冠なりけりといへりけり。

やまたかみくものいはねをとめておつるたきのしら玉こ多ナひズくなり（片208）・平187）

【割注】

綽齒灼切。寛也。緩也。或作「綽焯」。

【校異】

ナシ

215 戴憑重席（四六）

戴憑（三）重席 私云、戴憑字次仲 旧憑作馮誤。（二）

戴憑（三）、才学世にきこえ、義理人にすぐれたり。おほやけ、正旦の朝賀に文道にかしこき人をぬきいで、召あはせて論談をなして試みらるゝに、まけたる人の席をとりて、かちたる人のむしろに重重られけり。時に戴憑（三）五十余枚本をかさねてけり。天下目を驚し、人ことぐくほめけり。

いそちあまりはるのむしろをかさねたることばのはなにしくものぞなき（片209）・平188）

【校異】

（一）戴憑——戴馮（岸）

（二）旧憑作馮誤——ナシ（岸）

216 韋賢滿籛（二六五）

前漢韋賢滿籛

魯人韋賢、字は長孺と云。漢の丞相也。丞相の致仕する事、韋賢よりはじまれり。少子玄成も丞相にいたれり。韋賢、玄成字をしへて云、つねのことばに云、このためにのこしをかんと云、黄金を満ム籛ヨリ、不レ如一一經一といへり。玄成字は少翁と云、范陽侯になりけり。

籛は篋籠のたぐひなり。謂レ箒為レ籛、箒少籠なり。致仕は家にありて政を行也。

さもあらばあれこがねはなさく山のはもこをおもふみちのしるべならねば（片210）

いにしへやこがね花さく山のはもふみゝるみちにしかじとぞ思ふ（平175）

【校異】

（一）孺——儒（岸）

217 安世三篋（四〇〇）

前漢安世三篋（二）

漢の武帝、河東にみゆきして書三篋を失ひ給てけり。張安世そのふみを昔見てけり。そらにかきて帝に奉る。帝うたがひおぼ

して、後つのでて本をみてあはせらるゝに、一字もかはらざりけり。

あけてみるみどりのいろもかはらぬやおなじむかしのほごさきのまつ(片 211・平 189)

【校異】

(一) 篋——茵(岸)

218 子房取履(五二七)

前漢子房取履

漢の子房は張良が字也。子房わかき時、下邳の石橋の上に行て遊びけるに、褐カフを着たるひとりの老翁のすぐるがことさらに履をおとして、子房にとりてはかせよといふを、心えぬ事とおもへども、老をうやまふゆへに、履をとりて跪てはかするに、翁たちながらはきて、咲て去ぬること一里ばかりありて、おきな又帰り来れり。うちわらひて、汝に道をおしへんといふ、則太公兵法を授て云、これを読んできみの御師たるべしといへり。

老翁は黄石公、々々々(土星也)。

みちのべのくつのとまでおもひきやふみゝるはしとならむものとは(片 212)

たび人のくつのかよひぢとりもあへずふみゝるはしとなりけるかな

【校異】

ナシ

219 太叔弁給 摯仲辞翰(七九 八〇)

晋書太叔(二)弁給(三) 摯仲(辞翰) 【割注】

太叔(二)と摯中とは共に列卿たり。公座にのぞむことに諍ひけり。太叔(三)が言には摯仲こたふるかたなく、摯仲が筆には太叔(二)のぶるところなし。とりどりに聞えけれども、筆なをまされりとする。

いかでかはことばのなみをちらしてもふでのうみをばくみつくすべき(片 213)

いひちらす木々のこのはのくれなゐにそめますふで(三)の色もありけり(平 190)

【割注】

私云、太叔(三)字は広多也。

【校異】

(一) 叔——舛(岸)

(二) 冷——給(岸)

(三) ふて——(筆)(岸)

220 管寧割席(六五)

世説管(寧)割席 私云管寧、字幼安、北海の人也

管寧と華歆と(二)書を読けり。時に車軒本に乗たる人、かどのまへをすぎけり。華歆、書をすてゝたちはしりてみけり。管寧割席、汝正に我どもにはあらざりけりとぞ云ける。

華歆、邴原、管寧、此三人は友也。世人、一龍といへり。華歆を頭渠本とし、邴原を腹とし、管寧を尾渠本とせり。又、華元妻に

をくれてふたゝびめとらず。曾參これがためしを思へり。王駿妻にをくれて、ふたりがあとをまもれり。管寧も妻にをくれて、昔を顧てひとりなんすみけり。

あきかぜにやどもさだめぬむしろだのいなばの露にこゝろをぞおく(片214)

【校異】

(一) ナシ —— 俱に(岸)

221 周公握髮(三〇一)

周公【發記】握髮捉鬢角切撮也。一日握也。

周公は周の成王の執政也。周公の子伯禽に魯国をたまはせけり。伯禽、国へ趣く(三)時、周公諫て云、国にして人をあなづる事なれば、我は文王の子、武王の弟、成王の叔父也。天下にをいて賤からず。しかはあれども、一たび髪を洗ふ時に、三たび髪をとり、一たびものをくふとき、三たび吐て人にあふ。猶天下の士をうしなはむ事をおそるゝなりと云けり。

ことしげし本マク(左物之)うしと思ふおりぞなきわれたづねくるひとはかはれど(片215)

【傍記】

握本并日録

【校異】

(一) 趣く —— 赴く(岸)

(二) 叔父 —— 舛父(岸)

222 鄒陽長裙(四七)

前漢鄒陽長裙

齊の鄒陽が呉王にたてまつる書に云、臣、智をつくし、議を左本本かえ二、精をかへ、慮をきはむるに、おかすといふ国はあるまじ。いづれのおほやけの門にても長裙疑本を三ひかざらめやと書のせて思をなんのべけり。

あまのとのあけゆくそらを見ることにたなびくゝものもすそなりけり(片216)

【校異】

(一) 議を左本本かえ —— 議ををえ(岸)

(二) 長裙疑本を —— 長裙を(岸)

223 夏侯拾芥(二六六)

前漢夏侯二拾芥

漢の夏侯勝、字を長公といふ。夏侯が云く、士は経術にあきらかならぬことを病とすべし。まことによくあきらかなれば、その青紫をとること、如三俯字+色本拾拾ハシカ地芥ヲ。

青紫は卿大夫の服なり。文にだにもあきらかならば、卿大夫にのぼらむこと、うへにふしてしもの芥をひろはむがごとくやすぐうべき事なりといへり。

あきらけきみちだにあらばくらあ山身をしばらくやこゝろなるべし(片217)

【校異】

ナシ

224 黄向訪主 (四一九)

旧註黄向訪主

後漢の黄向、字は文章、清廉なりし人也。昔道をゆくに、金の珠琪一囊おちたるあり。そのあたひ三百余万にあたりぬべし。ぬしのなげくらむ事をあはれびかへり見て、かたゞぬしを求て、つゐにたづねあひて、たしかに返しあたえけり。主の云、おとして後、正にたづねあひて我物にあらず、始て汝がものをうるなり、しかれば半分をとらむと云て、半分をば黄向にあたえてむくひけれども、かたくなびてとらずしてさりぬ。

ちる花をもとの木ずゑにふきかへすみねのあらしのなき(す)をぞ(三)しる (片218)・(平195)

【校異】

(一) なさ(す)をそ —— なさけをそ(岸)

225 南風擲孕 (三九五)

南風擲孕

晋の恵帝の後南風、嘗(二)手をおろして多く人をころしてけり。あやまつ所なけれども、人のことにつきて、自ほこを取て、はらめる女をさしころしてけり。或は哀みなげく人もあり。或はおどろきにくむ人もありけり。后、かたちみじかく色あをぐるにして、まゆのしもに大なるきずあり。恵帝、ともに酔えるがごとくにして、世おさまる時なかりけり。恵帝かくれ給て後、趙王倫うちころしてけり。

あらかりしきばの風のみきしよりちくさのはなもつゆになくなり (片219)

花の色もむしのうらみもたえざりききばの風のはげしかりしに (平196)

【校異】

(一) 嘗 —— 昔(岸)

226 彦倫鶴怨 (五二〇)

彦倫鶴怨

晋の彦倫は汝南の人也。初は鍾山に籠居て、後には刻の令たり。孔稚珪、旅行の路にて、かの草堂をみて、おもひいづることやありけん、北山の移文(三)を作れり。其詞云、

蕙帳空(テ)兮夜鶴怨、山人去(テ)兮曉猿驚。

やま人のあとのいほりに月ふけてありあけのしもに(一)こゑのつる (片220)

【校異】

(一) 移文 —— 移の文(岸)

227 孟宗寄鮓 (二〇四)

孟宗寄鮓

孟宗は江夏の人也。晋武の時、魚の池の監たりき。時に母の許へ魚のすしを送りけり。母是を返て云、汝が魚官の身として、すしを人にほどこさば、世の人うたがひ池の魚にまの(二)がたかるべし。いまより魚を人にほどこす事なかれ、とねん(一)

ろにいさめけり。

おもひよるなみのころもゝうかるべしひといはれのいけの
となりは (片 221)

【校異】

(一) のかな —— のかれ (岸)

228 王承魚盜 (二五二)

晋書 王承魚盜

王承、字^レ安期と云、東海郡の守也。小吏の池の魚を盜むあり
けり。綱紀推^レ之^ヲ、王承云、文王のそのは与^レ衆共に同^レ魚、々
をおしむべきにあらず、とてなだめつ。又夜を犯せるものを召
とりて来れり。其人を問に、我師のもとに行て書を読ほどに日
のくるゝをわすれて、夜に入てゆきかゝれるなりといへり。文
を好める志をほめて、鞭^二撻^一寧越^{以本}立^二威名^一、非^二政化^一之^レ本
者^二と云て、使をそへて家へかへし^三をくりてけり。

綱紀推之といへるは綱紀は主簿也。主簿をして宣^レ之也。犯
夜といへるは、もろこしにはよる、人の里にいたれるをば、
をかしをなすといへり。寧越は中牟の鄙人也。みなかわたら
ひしつゝ、田つくる道をうき事に思て、まぬかれん事をとも
だちにいひあはするに、文を学ぶにはしかじと、卅歳にして
いたりなんと云けり。寧越が云く、人はまさにやすむとも、
我はあへてやすまじ、人はまさにふせりとも、我はあへてふ
せらじ、十五歳にしていたりなんといへり。つゝに十五歳に
して周王師^ス之^ヲ、又云、人は正に寝とも我はいねじ、人は正
に食とも、我は不^レ食。

はるかぜのふきこざりせばふかゝりしいけのつらゝをたれか
とかまし (片 222) ・平 198

【校異】

(一) 政化 —— 致犯 (岸)

(二) 家へかへし —— 家へかへ^らし (岸)

229 毛宝白亀 (二六二)

晋書 毛宝白亀

毛宝江のほとりにて、漁人の白亀を釣たるをみて、あはれびて
あがひて江に放て、後に石虎將軍と諍ひ戦ふに、まけて江にお
ち入ぬ。物をふむ心地して、岸にいたりてたすかりぬ。あやし
と思て見れば、昔放し亀なりけり。甲のながさ四尺ばかりなり
といへ^り (二)。

晋書に云、毛宝、市に出でたるに、白亀の四五寸ばかりある
をうるものあり、毛宝これをかいとりて、たすけ養て大にな
して江に放つ。其後、邾城のいくさにおちて、毛宝が兵六千
人^三江に溺てしぬ。毛宝よろいをき、かたなをぬきて江にお
ち入ぬ。大なる石にゐたる心ちして、東の岸にいたりつきて
たすかりぬ。怪と思てみるに、昔はなちしかめの五六尺ばか
りになりて、毛宝をたすけ^{本伝非宝}るなりといへり。

としをへておもひはなちしかはかめもめぐりあふせのあさか
らぬかな (片 223) ・ (平 199)

【頭注】

非^ニ毛宝^ニ。宝^カ。軍人也。

【校異】

(一) い(ふ) — い(へり) (岸)

(二) 六千人 — 六十人 (岸)

230 養由号猿 (一八〇)

淮南子 養由号猿

養由基は弓いることならびなかりし人也。柳の葉を百歩去てい
るに、もゝたびはなつに、其矢もゝたびあたりき。楚の恭王か
りし給に、ひとつの白き猿あり。かれこれいるといへども、
猿木の枝をめぐりて、矢をのがれぬ。又恭王、養由を召ていさ
するに、養由ひとたび弦をなづるに、猿木をいだきてかなしび
なきけり。

語林云、養由とりけだものを射に獸にげはしる。矢にしたが
ひて走るにのがるゝ事をえず。

あづさゆみはるのみどりの柳かけまさるまどゐはあらじとぞ
思ふ (片224・(平200))

【校異】

(一) かれこれ — か(れ)こ(す) (岸)

231 鄒衍降霜 (八八)

鄒衍降霜

鄒衍、燕の恵王につかへて、忠をきはむといへども、人の讒に

よりに恵王にとらへられけり。鄒衍、天に仰て憂るに、夏の月
これがために霜をくだせり。

しらつゆのをはりのみかは夏くさにむすぶうらみもしもとな
りけり (片225)

【校異】

ナシ

232 不疑誣金 (九三)

前漢書 不疑誣金

漢の直不疑^三は南陽の人也。文帝の時、郎として仕へけり。周
舎の郎、金を失へりけり。金の主、不疑をうたがひけり。不疑
あらがはずして、金をかふて償ひ返しけるをみて、金を盗みた
る人、あさましと思て、金の主に返してけり。金の主、大に恥
かなしびけり。世の人、不疑を長者とほめけり。

ゆめにだにまだみぬよはのぬれぎぬはかへしてのちぞおどろ
かれける (片226)

【校異】

(一) 直不疑 — 雋不疑 (岸)

233 檀郷沐猴 (九五)

前漢書 檀郷沐猴

漢の平恩侯、許伯仁^{ナシ}が家に、丞相以下の時の人来賀しけるに、孟
寬^{ワシ}饒ひとりこざりけり。許伯よびにやられければ、始て入来れ
り。東にむかふて独座せり。賓客^{西平}○(三) たけなはにして、興に乗

ける程に、長信少府檀長郷、犬と猿とのたたかひあへるまねをして舞けり。時に客みな大に咲ひけり。寛饒ひとりよろこびずして、後におほやけに奏て云、列郷の身もちてかるくしく^三沐猴の舞をなす事、礼をうしなへるなりと申けり。世にきこえにけり。

いかばかりみづのころの^{ナマ}けんなみたちはぐさるさは
のいけ (片227)

【校異】

(一) 賓客[○]——賓客 (岸)

(二) かるくしく——かるくしく (岸)

234 辺韶経筒 (二二四)

辺韶^三経筒

後漢の辺韶^二、字は孝先と云、数百人の弟子に^{「補」}あざけりて云、辺孝先、腹は便々として書を讀にもうし、たゞひる欲眠といへり。辺韶聞て答て曰く、辺をば姓とす。先をば字とす。はらの便たるは五経の筒也。只ねむりを欲するは経のことを思也。ひるいねては周公と夢を通じ、閑にしては孔子と心を同くす。師をしてあざけるべき事は、いづれの典記にかいでたるといへりければ、あざけるもの大に恥けり。

たまくしげあけくれねぶるなのみしてころのはのりにさめけるものを (片228)

【補入】

文道を訓へ授けり。昔ひるねしたりけるに、弟子

【校異】

(一) 韶——韶 (岸)

235 嵇紹不孤 (二七八)

嵇紹不孤

嵇紹、字は延祖と云、嵇康が子也。昔嵇康、人の讒によりて死罪にをこなはるゝ時、嵇紹をよびて、我しぬといふとも、山公あり。汝みなしごたるべからずと云けり。山公は山濤也。嵇康と竹林のともにて、志あさからざりしゆへなり。後に王[、]軍[、]紛張[、]やぶるゝ時、百官にげはしりけるに、嵇紹ひとりおほやけにつきそひたてまつりて、いくさの矢をふせぎけるほどに、矢にあたりて命を失にけり^三。○^{「補」}いくさはりて、人、御服をあらはんと申に、嵇侍中が血なり、すつる事なかれとて、なげさうれへ給けり。

たのみこし竹のはやし^の友のみぞわがこのよをもあはれとおもはん (片229)

【補入】

嵇紹が身より血ながれいで、おほやけの^三御服にふれそゝきけり。

【校異】

(一) 失にけり——失てけり (岸)

(二) おほやけの——おほやけ (岸)

236 文翁興学（二八六）

諸国学校
文翁學校

漢の文翁は蜀郡の太守也。国の中に文道を発し、学校をたて、人をすゝめ、みちをひろめけるなり。

とだえてもきてやみなましいにしへのみちをあらはず人なかりせば（片230）

【校異】

ナシ

237 優旃滑稽（三五七）

史記
優旃滑稽

優旃は秦の（偶）なり。たけみじかくして、よのつねに咲言をこのみけり。いつはりをろかしてたはぶれことを云けるが、其詞ごとに政理に叶けるなり。始皇帝、群臣に酒をたまひけるに、冬の天に寒雨くだりけるに、階楯の人みなぬれしほれてさむかりけり。優旃、檻によりて云、汝たけたけれど、雨のうちにてたてり。我たけみじかけれども、ぬるゝ事なしと云けり。おほやけ聞給て、なかばやすめかへされけり。又、おほやけ、苑囿おほきになさむとし給を聞て、優旃が云、よいかな、敵、東よりきたらば、とりけだものをして、是をふせがしむべしと云けり。おほやけこれを聞給て、其事をとめられにけり。又、二世帝の時、城に漆ぬらんとし給に、よひかな、敵の来らむとき、うるしによりて、のぼる事あたはざらんことをといへり。帝聞給て、其事をとめられにけり。戯れいへる事、しかしながら実の詞にてなむありける。

なにとなくくちずさむかときこえしはよのためふかきまことなりけり（片231）

【頭注】

本文、旃曰、佳哉漆城蕩冠来不能上、即欲就之、易為漆耳。顧難為蔭室二世笑而止。

【校異】

（一）（偶）なり——倡也（岸）

238 惡来多力 飛廉善走（三七七 三七八）

史記
惡来多力 飛廉善走

惡来は飛廉が子也。飛廉は足はやくして、走つゞくものなかりけり。惡来は力つよき事ならびなかりけり。虎をてづからひきさきなどしけり。殷の紂といへる惡主に父子ともに仕へけり。心にたがふ人をば讒しければ、讒につきてほろぼさるゝものおほかりけり。周の武王の紂をうつ時、惡来もころされにけり。飛廉は北方に遷みて、紂のために石■（王十郭）をつくりてまぬかれにけり。

ゆく水のはなみたかきせゞよりもはやきは人のあゆみなりけり（片232）

【校異】

ナシ

239 蘇章負笈（三九四）

前漢 蘇章負笈

後漢^(一)の蘇章、字を士成^(二)と云、負^レ笈^ヲ、師に随てゆく事、千里をもとをしとせず。

ゆきかへりみ^々をばをもくおもふかな身にをふほどのあゆみならねど (片 233)

【校異】

- (一) 後漢 —— 後漢 (岸)
- (二) 士成 —— 士成 (岸)

240 孔愉放亀 (四二七)

晋 孔愉 (一) 放亀

晋の孔愉^(一)、字を敬康といふ。亀を余不溪^{字本}のながれに放けり。亀、左にかへり見て去ぬ。孔愉^(一)、のちに余不亭の長になされにけり。堺に入て印をみるに、亀左にかへりみる形なり。又さうらにいるに、なをしかり。この時さと^(一)り (み) て^(二)、おびしにけり。

ふな人のをしてのなみのあとことにむかしのかめのかげをよせける (片 234)

【校異】

- (一) 愉 —— 愉 (岸)
- (二) さとり (み) て —— さとりえて (岸)

241 西門投巫 (四七一)

史記 西門投巫

後漢の西門豹、鄴^{縣本}の令たり。其所のならひにて、河伯神をまつる時、人のむすめをかざりて、河伯神のめとなづけて、いきながら水に入れり。おや、はらから、おしみかなしむ事、かぎりなかりけり。西門豹、此事を聞て、其時は^(一)我に告よと云けり。来てつぐる時、ゆきて、大巫嫗ならびに弟子の女、三老とて此事につかさどるもの共を、しかしながら水に入れれば、其所の長者以下、みな頭をた^レきちをながしておそれをの^レきて、色を失ておがみけり。是より後、人のむすめの命をたもつ事をえたりとなんいへり。

せきとむる人なかりせば川かみやおもはぬ浪になをしづまし (片 235)

【傍記】

血涙歎 (右傍) 血流本 (左傍)

【校異】

- (一) 其時は —— 其時 (岸)

242 郭伋竹馬 (四九九)

後漢 郭伋竹馬

後漢の郭伋、字を細侯といふ。并州の判史^(一)として任に赴く時、河東^(二)の数百の小兒、各たけの馬に乗て拝迎しけり。郭伋問て云、兒等^(三)、なんぞとをくより來れるといへり。兒答云、使君いたれるをよろこぶゆへに、来て拝迎するなりと答けり。後に兒、又使君のかへるべき日をとふ。郭伋かへる時、一日さきだちて^(四)山野にまうけて又をくりけり。

たけにのるおなじともをぞむれてこしときはのさとをあるじ
まつとて (片 236)

【校異】

- (一) 判史教本 —— 判史 (岸)
- (二) 河東西河本 —— 河東 (岸)
- (三) 児等曹本 —— 児等 (岸)
- (四) 一日さきたちて与本文違 —— 一日さきたちて (岸)

243 劉寛蒲鞭 (五〇〇)

劉寛蒲鞭

後漢の劉寛、字を文饒といふ。南陽の大守として国を治る時、とがあるものをば蒲の鞭していましめけり。楛しもとにあらざれば、人痛き事なしといへども、人の心を恥むしめしるしなり。是よりして、郡のつかた —— 二ながくをかすところなしといへり。無歌不審。

【校異】

- (一) つかた —— つかさ (岸)

244 黄尋飛銭 (五〇四)

黄尋飛銭

海陵の人(黄)尋二、身にまことふかく、人になさけ深かりき。初は貧しかりけれども、後に風ふく時、雨のごとくに銭とびける。家の籬のこずゑ、其外にはみぎはまでおつる三。数もしらず。みなひろひえたる事、数千万にをよぶ。終にとみさかへ

て、河北に名をほしきまゝにしけり。
かぜにちるきしの木の葉のおとならでかきやまがきに雨とふるなり (片 238)

【校異】

- (一) (黄) 尋 —— 黄尋 (岸)
- (二) ○事 —— 事 (岸)

245 馮煖折券 (五一四)

馮煖折券

馮煖は齊人也。家貧く乏くて、孟嘗君をよりのみけり。孟嘗君、薛と云所に人に物を多く借預たる二ことあり。馮煖を使として、薛に行て債主の物をせめ納て、我許になからむ物を市に買て来れと云ければ、ことうけて薛へ赴にけり。債主をよびて、券どもを併即敷やき失てけり。人皆万歳をよばふ。悦事無限。馮煖かへり来て、君が許になき物を買てなんまうできたるといふ。なにを買たるぞと問に、義を買て侍なりといふ。義とはいかなる物ぞと問に、答て云、君が府蔵には財物みちつめり。なき物は只義のみなり。是によりて、債主の券を焼失ひつるに、君を悦ぶ事かぎりなし。このゆへに、義を買て君に授くるなりと答ければ、孟嘗君、いみじくうれしと思けり。馮煖は長鋏を弾じてうたひし人也。債主とは、ものおほせたる人なり。

やどごとにとしのせめてやなげかましはるのつかひのかゝ
(る)ざりせば三 (片 239)

【校異】

- (一) 借預たる —— 借領たる (岸)
 (二) かゝ(る)さりせは —— かゝらさりせは (岸)

246 何曾食万 (五一六)
 何曾食万

晋の何曾、字を穎考二といふ。日ごとのくひ物の入事、万錢三にをよぶに、なをはしをくだすところなかりけり。餅は十字にさかざればくはず。

ひとたびよろづのかずのつもりけるやどのあさげにけぶり
 たちけり (片240)

【校異】

- (一) 穎考 —— 穎孝 (岸)
 (二) 錢錢 —— 錢 (岸)

247 婁敬和親 (五三三)

前漢 婁敬和親

婁敬は晋人也。洛陽に来て輓輅の轄をぬきて、漢高祖をすゝめてみやこを関中に遷し給へと申しけり。後に建信侯になされにけり。時に、多びすの王单于、兵をおこして国みだれ、人悉くうれへけるに、婁敬申云、長公主をもて彼に妻にあは(け)給はゞ、可宜之由を申しけり。漢祖の后呂太后、ひるよる嘆てなきで、我は呂太子と一女とのみあり。いかでか(匈好)匈奴の国にすてむと云て、終に家人の娘をとりて長公主となづけて、单于にあはせられにけり。婁敬ゆきて和親して後に、ながくしづまりにけり。長公主は漢祖の女也。

輓輅は一木横鹿車前、二人挽之、一人推之云へり。
 なみのをともの(ど)かになりぬわたしもりあぶくま川のし
 るべせしより (片241)

【校異】

- (一) (匈好)匈奴 —— 匈奴 (岸)

248 王陽囊衣 馬援薏苡 (五三七 五三八)

前漢 王陽囊衣 後漢 馬援薏苡

後漢の王吉、字を子陽といふ。瑯琊の人也。及子孫奉養甚奢れり。しかはあれども、うつりさる時は、衣を入たるふくろひとつもちたりける。奢侈の名をけさむとて、ふくろに衣ばかりを入れて、他国へさりけるなり。時に、馬援、はじめ交趾にある時、つねにつしだまを服して、よく身をかるくしけり。南方に、づし玉のみ大なるあり。ゆきてそのみを多く取て、一車につみてかへりければ、時の人、南土の珍怪と思へりけり。貴賤皆望之。馬援時に有寵。故莫以聞(左)。及率後有上書上書譜之者、以為前所載還、皆明珠文犀といへり。又吳祐が文怪が南海の太守たる時、青き竹をとりて書をうつさんとしけるに、子吳祐いさめて云、昔の馬援はづしだまによりて謗をおひ、王陽は衣の袋を以て名をもとむ。嫌疑のあひだ、まことに先賢のつしむところなりといへりけりと云へり。

囊衣ハ一囊之衣也。有底曰囊、無底曰囊トいへり。
 きしかたをおもひかへ(り)てトたびごろもいかなるさとに
 うつり行らん (片242)

【校異】

- (一) 譜——讚〈岸〉
- (二) 又吳祐呉祐か——又吳祐呉祐か〈岸〉
- (三) 子吳祐——吳祐呉祐〈岸〉
- (四) かへりて——かへして〈岸〉

249 董遇三余 〈五四九〉

魏略董遇三余

魏の董遇、字を季直と云。左伝をよく学びさとりけり。したがひ学ぶるものゝ、苦渴にして日なしといひければ、董遇が云、三余に三余を以てすといひけり。三余といへるは、冬は年のあまり、夜は日のあまり、あめは月のあまりなりといへり。三余の学、是也。

ゆきのその月のもとまでおもひしにあめもころのはれまなりけり (片243)

【校異】

- (一) と——と云〈岸〉

250 桓温奇骨 〈二一七〉

晋書桓温奇骨

晋の桓温、字は元子と云。父桓温「晋書十功十升」云、字茂綸と云。桓温うまれての後、温嶠と云人、相し云、此兒は奇骨あり。試になくこゑをきくに、まことに「英」物なりけりと云。これによりて、温嶠が一字をとりにて桓温とは名づけたるなり。ひととなりて、まづ大司馬になされて、つぎに丞相になさ

れけり。温嶠がむかし相せしところもたがはず。天下無双の名士なりけり。

ねざすよりかつくひとのあふぎしや木だかゝるべき松のゆくすゑ (片244)

【校異】

- (一) 元子——子元〈岸〉
- (二) 父桓温——父桓温〈岸〉
- (三) 「英」物——英物〈岸〉
- (四) ところも——ところ〈岸〉

城門郎者、多年之弟子也。拾蟹聚雪之処々、久守二函一杖二之礼儀一。嘲レ風レ月レ之時々、先存レ視草之故実二。爰ニ李一蒙求、李嶠百廿詠、白居易新樂府等之中、抽テ其義幽玄其説表的之句一、以二仮名一書二其詞一、以二和語一詠二其事一、歌二余百首一、卷及二數十軸一。斯中於二樂府一者、重テ呈二周詩所制一和歌一也。余、休閒之際、披レ閱二之処一、目不レ暫レ捨一、心多レ所感一。尋レ繹レ吟レ詠一、欲レ罷レ不能、仍雖レ顧二愚魯之才一、愁レ寄二和漢之什一矣。

翰林老主孝範

百詠蒙新樂府、探リ其一「阜十責」旨述二歌詞一。

歌詩一々兼ニ華実一、還テ咲レ元和天寶詩。(片245)・(平202)からくにのやへのしほぢのあさぎりをくまなくはらふしきしまの風 (片246・平203)

【傍記】

袴

【校異】

(一) 函(杖) — 函杖(岸)

(二) 袴 — 袴(岸)

(三) 余百首 — 余數百首(岸)

訂正

【校異】

(一) 呈 — 呈(岸)

(二) 袴 — 袴(岸)

前々稿(第二十七号)

① 74 頁下段… 11 王粲覆某

訂正事項 和歌の注記

訂正内容 (片11・平11) ↓ (片11)・(平11)

② 76 頁下段… 15 麩笠收資

訂正事項 二首目の和歌の注記

訂正内容 (平15) ↓ (片15)

③ 79 頁上段… 夏部目錄

訂正事項 【校異】の記載漏れ

訂正内容 【校異】/ ナシ

④ 89 頁上段… 46 鳴鶴日下・土龍雲間

訂正事項 歌題表記

訂正箇所 (題無し) ↓ (鹿)

⑤ 93 頁上段… 冬部目錄

僕^レ、久^ク仰^ギ翰林之嚴訓^ヲ、得^{タリ}嗜^ム文苑之苦字^ヲ。每^ニ早^ニ短詞^ヲ、必加^テ高覽^ヲ、依^レ領^ニ取捨^ヲ、令^ニ散^ニ鬱蒙^ニ。然間、云^ニ東之昔^ト、云^ニ洛陽之今^ト、為^{タメ}教^{ヘン}幼童^ヲ、抄^ニ出^ス三^ニ之書^ヲ、所謂撰^ニ蒙求之中^ヲ、叙^ス十四卷^ヲ、抽^ニ百詠之句^ヲ、連^ニ十二卷^ヲ、述^ニ樂府之章^ヲ、分^ニ五十卷^ヲ、各々和其詞^ヲ、軸々綴^ニ其詠^ヲ、是也。或詩或歌、可^レ恥可^レ秘。決^ニ是非^ニ、偷^{カニ}伺^ニ賢慮之間^ヲ、忽^チ投^テ周詩、被制和歌、拜見之處、自愛難^レ休、仍押^ニ本韻^ヲ、猥表^ス中情^ヲ矣。

城門郎源光行

李^ノ (袴) (一) 李嶠居易作、為^レ人^ノ為^レ物頭^ニ奸詞^ヲ。愁^ヒ模^シ漢語^ヲ成^ニ和字^ヲ、恭感^ス兩篇^ノ歌与^レ詩。(片247)・(平204)

うらかぜ (片248・平205)

蒙求和歌畢

【傍記】

袴

訂正箇所 【校異】の記載漏れ
訂正内容 【校異】／ナシ

⑥ 94頁上段…60 閔損衣單

訂正事項 和歌の注記
訂正内容 (平54) ↓ (平54) ※見セ消子前平54

前稿 (第二十九号)

① 42頁上段…81 飛燕体輕

訂正事項 和歌の注記
訂正内容 (平69) ↓ (平69)

② 42頁下段…82 班女辞輦

訂正事項 和歌の注記
訂正内容 (平70) ↓ (平70)

③ 46頁上段…90 齊后破環

訂正事項 和歌の注記
訂正内容 (ナシ) ↓ (平55)

④ 46頁上段…91 宋女愈謹

訂正事項 翻刻誤り
訂正内容 中々ぞと今は↓中々ぞ今は

⑤ 51頁下段…105 子猷尋載

訂正事項 和歌の注記
訂正内容 (片100)・(平87) ↓ (片100)・(平87)

〔附記〕

本翻刻は、二〇一三年度大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費(Ⅱ)、および日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))『蒙求和歌』に見る漢文学と和文学の融合(課題番号25370245)による研究成果の一部である。原本閲覧・翻刻掲載の許可を賜った山口県立山口図書館に厚く御礼申し上げる。

(あお あすか・日本学術振興会特別研究員RPD)
(こやま じゅんこ・国文学研究資料館研究部准教授)
(たけしま かずき・立命館大学非常勤講師)
(つた きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)
(なかしま まり・関西大学大学院文学研究科博士後期課程)
(はまなか ゆうこ・京都学園大学非常勤講師)
(もりた たかゆき・南山大学人文学部講師)
(やまなか のぶゆき・本学文学部非常勤講師)